

青い鳥

松島武治

わたしは決してふしだらな女ではない、そう信じている。女の顔は領収書だと誰かが言ったとか。失礼な話だ。わたしならいったいいくらの金額を自分の顔に書き込むのだろう。

大学が同期の槇さんは確かにわたしの憧れの人だった。彼がいいお家の坊っちゃん、お金に不自由することがなく、服装のセンスが抜群で、何かとプレゼントをくれるし、わたしをエスコートしてくれる時の憎らしいくらいよく気がついてやさしいこと。そんな様子を見れば彼はきつとわたしを愛してくれているはずだ

わたしは槇さんと何度かセックスをした。それまでに彼がしてくれたことに対して何となくそのくらいは応えなくてはならないかなと思った。初めての夜、彼はいくらか思いつめたような表情をしていて、それを見たわたしは「いよいよ今日だわ」と期待を抱いていた。果たして彼が「君をもつと知りたいんだ」とせまってきたとき、「やったあ！」と心の中で叫ばなかったとどうして保障できよう。

槇さんに対する気持ちに比べれば、片田さんへの思いはもう少し純粹だったかも知れない。

彼も大学時代のゼミの仲間、その情熱的な性格は誰からも愛されていた。論争好きだった彼は多くの「敵」をつくったが、その敵こそ彼のもっとも親しい友人たちだった。学費を滞納して「飯も食えない」学友たちは彼の所へ議論をしに行けば必ず夕食にありつけたという。そのころのわたしは遠くから微笑を浮かべて見ているだけだった。卒業して二年後、ゼミの同窓会で再会したのがきっかけで、わたしは彼と急に親しくなった、というより彼

の方から熱烈な求愛が始まったのである。当時のわたしは榎さんとお付き合
いをしていたが、片田さんのアプローチに悪い気はしなかった。わたしは若
い女お得意の焦らし戦法で応対した。デートしたり、彼のアパートでだべっ
たりしても、彼の熱っぽい視線には気づかないふりをしていた。これってフ
タマタってやつ？

彼はよく自分の夢についてよく話した。大学では文学部だったにもかかわ
らずなぜか工作機械の技師になった彼の夢とは、科学の最新の成果を取り入
れた技術で働く人々の労働を軽減することだというのだ。僕といっしょに人
生を歩んでほしいと、彼は言った。わたしはそんな片田さんの理想主義的な
考え方をいく分こっけいな印象を抱きながら聴いていた。

片田さんがなかば強引にわたしにキスをしたときも特に驚かなかった。あ
る意味、わたしが誘ったと言ってもいい。榎さんとは違った意味で期待して
いたのだ。わずか数ヶ月の間に 複数の男性と「恋愛」している自分に対し
て、わたしは自分をウエルテルに対するシャルロットに重ねてロマンチック
な気分浸っていたのである。

結論をいえば、わたしは結局二人のうち二人ともに別れてしまった。彼ら
が何となくわたしに飽きてきた、あるいは幻滅したのではないかという予感
があつて、急いでわたしから振ってやった。彼等はわたしが「もう一人」の
方へ走ったと思つたのか、いとも簡単にそれを許してくれたのである。

今のわたしは、彼等のうちどちらと結婚したとしても、その将来をあざや
かに思い浮かべることができない。榎さんと結婚したわたしは、きつと控え目
で貞淑な妻として夫を助け、夫の出世を自分の喜びとし、老いては息子のお
嫁さんと一緒に台所に立つお姑さんになっていくだろう。また、片田さんと
結婚したなら、きつと子だくさんで働き者の奥さんになって、苦勞の多い毎
日を一所けん命泳いでいっただろう。どちらも普通の生活で、幸福な人生
だ。どちらを選んでいても幸福になれる自信が私にはあつた。

積さんのお付き合いで妊娠することはなかったけれど、それをちよつと残念に思っている自分がいる。むかし絵本で読んだあのかわいいチルチルとミチルのように、これからまた自分の青い鳥を探しに自分の足で歩んで行かなければならないのだと思うと、何となく人生って面倒だなと思う。どこから青い鳥が飛んで来ないかなと思う近頃の日々である。